

女性学のパースペクティブ—アンドロジニイ

矢木 公子

六十年代後半にアメリカで誕生した「女性学」(一般に「女性を対象に、女性の視点から学際的に研究する学」と定義されている)が、我国へ紹介されて数年経つけれども、筆者の知る限りまだ「女性学」のパースペクティブ、視点について検討したものはほとんどみられない。そこで敢えて筆者が入手し得た資料を通して、その紹介を試みたのが、本稿である。

(一)

「女性学 (women's studies)¹」は、1960年代のアメリカにおける女性解放運動 (Women's Movement) と、大学改革運動の産物である。それは、初期 (1972年以前) の女性学の広がり方をみても明白であり、女性解放運動の跡を追うように、発祥地のニューイングランドからワシントンD. C. まで東海岸を下り、ピッツバーグおよびバッファローより西へ進み、サンディエゴからシアトルまで西海岸沿いに広がっていった。また女性解放運動が具体的に大学構内に入っていったのは、「積極的差別撤廃計画 (affirmative action programs)」の一部として、女性教授陣と事務官の地位を調査するためであった。しかし後になると、両者の関係は逆点し、女性学が女性解放運動の誕生を促す場合も生じてきた。たとえば、アイダホ大学の女性学が、アイダホ州モスコウの町などに女性解放運動を起したということもある²。

他方、60年代の世界を席捲した学生運動は、社会の根底を揺り動かす文化革命でもあったが、大学を中心とした面で、アメリカにおいては、ベトナム戦争に対する大学の荷担と、大学運営問題を中心に追及していった。その結果1965年には、自由大学・自由大学コースが設立され、既成の学問の領域には含まれない「第二次大戦後の合衆国の対外政策」「マルクス経済学」, 「キューバ革命」, 「中国」「ベトナム」というような地域研究や、黒人学および少数民族研究などがカリキュラムに登場した。しかし、女性教授陣と女子学生は、それらの既成のカリキュラムのギャップを埋めるべく登場した科目においてもなお、女性が対象外であることを認識せざるを得なかった。そこで彼女たちは、既存学問の狭い専門化 (specialization) を脱し、学際的研究として、そして何よりも教授法改革運動 (teaching movement) として「女性学」を誕生させた。一般にその成立は、1968~9年とされているが、ハウ (Florence Howe) によれば、1965年に早くもシアトル自由大学の女性史において女性学が始まっている³。また1970年初頭における女性学の野火のような普及ぶりと、女性学の抱える問題点については、既に館かおるによって詳述されているので⁴、ここでは割愛するが、1975~6年の時期にあっては、それは初期の自主講座の開催から、正式のカリキュラムに組み込まれ、大学当局から予算やスタッフの裏づけも獲得するといった第二段階 (phase two)⁵へ発展してきていると同時に、転換点にさしかかっている。また、単にそのような運営上の問題だけでなく、コースにおいても多様性が出てきて、入門コースから専門コースへ、さらには大学院レベルにまで広がり、時に

は、コースからプログラムへと発展し、かつ主専攻・副専攻あるいは二重専攻 (double major) としても登録できるようになった。さらには、このようなカリキュラム上の垂直の展開だけでなく、それは、キャンパス内外において、カリキュラムの外側で水平の展開をも示している。その時期は比較的早く、1972年であり、「教室での女性学 (classroom women's studies)」と「街頭での女性学 (street women's studies)」に大別される。後者は、大学のカリキュラムに組み込まれている「教室での女性学」以外のすべてを指している。それは文字通り街頭で開かれるのではなく、往々にして大学構内で開かれている自立相談所 (self-help clinics)、研修会、女性センター、新聞事業、協同組合などの活動から生まれてきたものであり、前者に比べると「街頭での女性学」の目標は、より以上に実践的であって、とりもなおさず「女性にどのような自由と生存、そして基本的ニーズの充足を達成するかを教える⁵⁾」ことである。この種の女性学はさらに大学の外へと拡がり、(コミュニティ・オーガナイザーのニーズに適合する程度でという限界はあるが) 女性の再就職訓練、主婦・高校生を対象とした講座を設けたり、囚人教育、生涯教育にも組み込まれたりしている。

「街頭での女性学」が大学構内で開かれている場合、ある地域では「教室での女性学」との間で、少ない予算と大学当局からの単位の承認をめぐる衝突が生じ、終には「街頭での女性学」が構内から去っていく事態も生じている。このような事態に対して、サガリス大学 (Sagaris, Vermont) では、1975年の夏季プログラムで、両者を統合しようという試みもなされたりしている⁶⁾。

両者の最大の分岐点は、その視点にある。つまり「教室での女性学」は、「対象はラディカルであっても、教授方法や予測は伝統的」であるべきであると考え、他方「街頭での女性学」は「ラディカルな対象は、あらゆる点で経験的 (experimental)」でなければならないとする。そこからさらに、後者にとっては前者にみられる定期試験が不合理となり、前者にとっては、過剰に「意識を高める」ことは、学問の客観性 (objectivity) と矛盾するが故に、教室外での活動とならざるを得ないのである。

(二)

女性学が成立当初より持つひとつの大きな目的は、女性 (そして男性) の教育を変革することである。その為に掲げられたふたつの柱が、「補償 (compensation)」と「意識を高めること (consciousness-raising)」である。両者が相関性をもつのは明らかであるが、現実には学問分野によって、いずれかにより重点がおかれて展開した。たとえば、歴史学のコースにおいては、過去の研究に女性がほとんど登場せず、したがってフェミニズムの視点からすれば当然必要とされる社会現象の歴史——産児制限の歴史・性革命運動の歴史——が欠落している。そこで女性学による「補償」が重要となってくるのである。これに対して文学のコースでは、「意識を高めること」に重点がおかれる。つまり男性作家の描く女性の文化的規定・ステレオタイプを吟味することによって、社会で女性の置かれている位置を自覚することから始まり、最近では女性作家による女性の経験の探究と、女性の意識の一般化を図っている⁸⁾。つまりそうす

ることによって、男性作家の描く女性のステレオタイプとそれに伴う女性の「不当な」社会的
位置づけの打破を可能とする意識をめざめさせようとしているのである。

「意識を高めること」は、女性学が女性解放運動から受け継いだ財産、とりわけ運動の「若い派」⁹ から受け継いだ特徴である。したがって、それは「教室での女性学」におけるよりも「街頭での女性学」において、より強く求められ、重視されがちである。だが「教室での女性学」もそれをまったく排除してはいないのである。では、何に対して、何を志向して「意識を高め」ようと、運動の、女性学の、担い手達は主張するのであろうか。

ジョー・フリーマン（彼女は女性解放運動組織の相互関連性に力点を置いて、その考察を進めている）によれば、いわゆる「若い派」は、「古い派」に遅れて、1968年に全国的集会を開催したが、その参加者の多くは、「対抗文化（counter-culture）」の主役であり、「新左翼（radical left）」運動からの脱落者であった。とりわけ後者は、「新左翼」運動の中で、徹底的に男性支配の実態を見せつけられ、男性不信に陥っていた。そこで彼女たちは、男性を排除した集団を組織し、そして自己概念の「再社会化」を求めて、「ラップ・グループ」による相互批判を実践した。その論理的帰結として「レスビアン・フェミニスト」が派生し、それについていけない者の中から「古い派」に移行する者も出るに至った。またケイト・ミレットのようにその逆の場合もあった。いずれにしても両派の関係は対立と相関性の両面を合わせもっていた。「古い派」の代表ともいえるNOWの会員調査（1974年）によれば、回答者383名の9%が政治的信条として「ラディカル・レフト」と答えている。このように「若い派」から「古い派」へ容易に移行し得たのは、NOWがその活動を通して政治的・社会的要求を獲得していくのを眼前にして、彼女たちのNOWの評価が初期の「改良主義的」から「実際主義的」へ変化したためである。これによってNOW自体も「若い派」の理念を組織に吸い上げることを通して、「古い派」の中心的存在から、フェミニスト組織へと変貌していったのである。そしてこのような運動の展開の中からやがてひとつの展望が開けてゆき、それが女性学にも引き継がれていくのである。そしてそれはまさに、種および個としての男女両性関係の考察を通して誕生してきたものであって、両性の相互性と平等性に力点を置く立場である。S. フェイアストーンも『性の弁証法—女性解放革命の場合』（*The Dialectic of Sex: The Case For Feminist Revolution*, 1970）において、女性解放革命の究極の目標は、両性の生物学的差異（彼女もそれを認めている）をテクノロジーによって消滅させることによって、分化している「男性的なもの」と「女性的なもの」とを再統合して「雌雄同体の文化」を創造することに置いている。そしてそのような状態に到達した時には、現在の「男性原則」が支配している体制では女性とともに被抑圧対象である子どもも解放されるし、男性自身も解放されると主張するのである。他方、両性関係の対立性に重点を置き、男性を女性抑圧のエージェントとして捉えたのがケイト・ミレットの『性の政治学』（*Sexual Politics*, 1970）であり、この立場を押し進めていくと「文化的ナショナリズム」に陥り、「レスビアン・フェミニズム」にならざるを得なくなるのである。しかし未来よりも現状を重視した場合、この立場の方が訴える力が強く、実際、女性解放運動の初期においては、前者以上に大きな影響力をもったのである。だが、それは過渡的

には認められる立場であっても、自滅的であることは明らかであり、やがて前者の展望へと運動全体が収斂してきたのである。その間に、『性の政治学』を批判しつつ、男性の特性と女性の特性は明確に区別し、それを生かした生き方を助長するのが正当であり、また男女の種差よりも個人間の差を重視し、個人を抑圧する要素自体は除去する必要があると主張して「リベレイション」よりも「エマンシペーション」を言明するアリアナ・スタシノプロスの『女性的女性』(The Female Woman, 1973)も表われた。この立場は、前二者の両性の空間的共在を大前提とした論と異なり、男性空間と女性空間を明確に区分した前提に依っているように思われ、そこに前者に対する的はずれの批判もみられるが、今ここではその点を追求する必要はないであろう。

女性学が女性解放運動から継承した展望・目標は、たとえば社会学の立場からは、ステレオタイプ化された性役割 (sex-roles) とそれを基礎づけている「男らしさ (masculinity)」と「女らしさ (femininity)」という二分化された心的特性の検討を通じて明確にされてきた。J. S. チャフェッツは、女性学の目標を “Women’s Liberation” にではなく、“Human Liberation” におき¹⁰、またW. フェーレルは男性解放自体について検討を加えている¹¹。それはいうまでもなく、両性関係の相互性への認識によるものである。このような展望を一言でいうならば、S. トビアスが女性学を定義づける際に用いている “androgyny (両性具有性)” という語であろう¹²。

(三)

ミシガン大学では、「アンドロジニと女性の地位」と題する女性学講座を設けている。その科目案内書によれば、教材として用いられているのは、次の三つである。すなわち、S. ボーヴォワール『第二の性』、C. G. ハイブルラン『アンドロジニの一認識について』およびS. L. ベム「アンドロジニ対精彩を欠いた女性と高慢な男性の編狭な生活」(これはスタンフォード大学学生1,500人を対象とした意識と行動の調査報告)である¹³。案内書は、三者の両性関係の検討・主張を以下のように要約している。すなわち、ボーヴォワールは、女性が社会的・経済的に男性と平等になるとともに、心理的にも従来の男性と同等になるように変わっていくことを主張する。だがこれに対して案内書は、そのような変容過程 (transformation process) は、女性の側からの一方通行であり、男性の特徴・責任・威信を当然としている点で、そんなに新しい世界を描いていないと批判する。二番目のハイブルランは「アンドロジニ」を、従来の「男らしさ」と「女らしさ」というふたつの心的特性が個人の心理的次元で融合した状態と定義づけているが、それを明確に認識する必要性を説くと同時に、文学における「アンドロジニ」的考え方の表われ方を追究している。案内書は、それによって、パーソナリティの内における生物学的に決定した性と反対の性の部分の抑圧がもたらした役割の両極化 (=性別分業) の状態と、女性の低い地位の跡づけを評価している。三番目のベムは、個人における「男らしさ」と「女らしさ」の両特性の均衡が、個人に多大の創造性と、意識・行動の両面で柔軟性 (flexibility) をもたらすと考え、そのような心的状態を「両性的 (androgenous)」

としている。

ここで以上のような女性学での用法を得ている「アンドロジニィ」の、語としての由来と用法について触れておく必要がある。

“androgyny”は、ギリシャ語の *ἀνδρo* (=male) と *γυνή* (=female) に由来する語であり、19世紀に生物学の分野で“hermaphroditism (雌雄同体性)”と同義に用いられている。すなわち、解剖学的・生理学的な意味での両性具有性に対する用語である。それまでは、むしろ“androgyné”やその形容詞である“androgynous”の方が一般的用法であった。しかしこれらにおいても、使用され始めた年代と適用範囲が同じというわけではない。“androgyné”は、14世紀のフランス語にみられ、英語としては16世紀中頃から使われ始め、当初は、身体的特徴を示す“hermaphrodite (雌雄同体者)”と同義に、また「柔弱な男性 (effeminate man)」とか「宦官 (eunuch)」の意味で用いられたが、18世紀には植物学において、雌雄同花序の植物をいうのに使用された。さらに、19世紀中葉では、天文学で惑星が他の遊星を伴っている状態を表わすのに用いており、20世紀後半では、心理的側面での使用が加わってきた。このような“androgyné”から、17世紀になると形容詞形の“androgynous”が派生し、最初は身体的な「両性具有者の (=hermaphrodite)」「(男が) 女のような」の意味と、占星学で「時には熱く、時には冷たい」星 (たとえば、水星) に対して用いた。そして18世紀末になると、植物学の分野で、「おしべとめしべを合わせもつ花や植物の」に対しても用いられるようになった¹⁴。

この他に、19世紀後半には“androgynic (=両性具有的本性や特徴の)”や“androgynism (=二元的状態から一元的状態への変化)”という語も出現したが、これらは滅多に用いられなかったようである。

今日、女性解放運動が触媒となって問題とされるようになった“androgyny (両性具有性)”は、男女両特性を合わせもつ心的状態を指すのであり、さらには性差が社会的・経済的・政治的に克服された社会の文化状況を指そうとするのである。その今日的用法は、古い用法、たとえばプラトンの『饗宴』に描かれている人間の本性の三元型の一つである「男女」の伴っている身体的両性具有 (hermaphrodite) とは、明確に区別されているにもかかわらず、18世紀後半のロマン主義芸術での身体的両性具有や性的異常、悪魔的扱い (たとえばオスカー・ワイルド『サロメ』、マラルメ *Hérodiade* や、19世紀後半のデカダン作家の「あふれるほどのエロティックな可能性」への関心 (彼らはアンドロジニィを単純に、身体的両性具有として理解していた) というような用法¹⁵ から、今日でもなお両者の混同の危険のあることをハイルブランは指摘している¹⁶、またスペンスとヘルムライヒは、心理的側面での「男性/女性」という二極モデルを放棄するという心理学者の要請から、二元的概念 (dualistic concept) の表現として“androgyny”を用いるのは、フェミニストからも、ノンフェミニストからも反対を受けたと述べている。つまり、既に *Webster's New Collegiate* (1974) の“androgyny”の項にも心理学的定義が含まれているにもかかわらず、またヴァージニア・ウルフの『私だけの部屋』 (*A Room of One's Own*) にみるように、この語の心理学的用法は文学の中で長い歴史を持っているにもかかわらず、人々は、「生物学的雌雄同体性 (半陰陽)」という元来の意味との混同を今

なお恐れているのである¹⁷。

同時にまた、この概念は精神医学面で用いる両性愛 (bisexuality) とも明確に区別しなければならない。つまりアンドロジニは第一に個人の心的状態の問題であるのに対して、bisexuality は、人と人との関係にかかわる事象である。そして何よりも、アンドロジニが、生物学的レベルでの性的アイデンティティで混乱を起こすことはないのに対して、両性愛は、そのアイデンティティが確立されていないが故に生ずるという点で、両者は相違するのである¹⁸。

以上のような用語上の注意を要するアンドロジニは、人間の心理に固有な元型 (archetype) であって、それは、人間の経験し得ない、かつ永遠に知り得ない「絶対者 (the Absolute)」より派生した、分離以前の混沌とした宇宙単位に表われている。つまり、それはあらゆる事物の分離以前の「全体」を指しているのである。それはあたかも、卵の黄味と白味が殻の中に一緒に閉じ込められている状態である。そこでは、相対する性質をもつ事物が共に存在しているが、それらはやがて二つに分離し、そして両極化していったのである¹⁹。シンガーは、人間心理も、このような分離以前の単位であって、つまり、男性の中にも「女らしさ (femininity)」が、女性の中にも「男らしさ (masculinity)」が存在している状態であって、いわゆる C. G. ユングの男性の中の「アニマ」と女性の中の「アニムス」のある状態であって、それがギリシャ神話や、ヒンズー教、道教、仏教、西欧のプラトン伝説の中に反映していると考えられる。しかし、ユダヤ・キリスト教的伝統の中では、家父長的な神のイメージは、アンドロジニによって損われるので、このような文化の中ではそれは抹殺されざるを得なくなる。それにもかかわらず歴史的には、「隠れた河 (hidden river)」として常に存在し続け、時には新しい観念の源泉となって宗教や文学を肥やし、またある時にはほとぼしる勢いで、極端に偏った政治・社会状況に対抗する観念として表面に表われてくるのであった²⁰。中世カトリック支配による物質 (肉体) 軽視に対して生まれてきた運動、ルネサンスも、その一例である。

今日、女性解放運動が触媒となって再び表面に浮かび出てきたアンドロジニであるが、それはとりもなおさず、ユダヤ・キリスト教文化における家父長的原理に基づく固定的性役割、両性の関係の変革を迫るものであり、そこからさらに社会体制自体の変革を期する展望である。そこには、従来の家父長的原理による社会では、男性・女性はそれぞれ本来の心的状態の半分を切り捨て、一方は「男らしさ」の鑄型に、他方は「女らしさ」の鑄型に適合しなければならないという不自然さがあり、両性ともに「全人的」に生きることができず、両性の関係も歪められたものであるという認識がある。この点から、ハイルブランは、アンドロジニを個人の役割と行動様式が自由に選択し得る世界へと社会を変化していく運動を導き、唯一の未来の救済手段 (salvation) であると位置づけている²¹。

アンドロジニとは、従来の「男らしさ」と「女らしさ」の二極的 (bipolar) な捉え方と違い、個人心理内での両特性の共在、すなわち二元的 (dualistic) 把握である。

山口昌男は、人間の思考法が基本的に二分的であることを指摘しているが²²、「男らしさ／女らしさ」の従来の把握の仕方もまさにそうであり、生物学的性差を基礎として、それを補強・

拡大した社会的性差が作られ、性役割を固定化している²³。しかしそれを通文化的にみた場合、「男らしさ／女らしさ」がいかに文化的に規定されたものであるかが明白である。M. ミードのニューギニアの三部族にみられる両性関係は、それを明確に表わしている。すなわち欧米社会における「男らしさ／女らしさ」を基準としてみると、アラペシ族は男女ともに「平和的、協同的、受動的」で「女らしく」、物や人を「育てる」ことに価値をおいている。ムンドグモ族では男女ともに「女らしい」特質をもつことは欠点であり、家族集団内の人間関係さえ攻撃的・敵対的である。女性は子どもを産んでも、できる限り子どもを邪険に扱って、女性的であることを負い目としている。またチャンブリ族では、男性は「物おじしやすく、警戒心が強く、神経質」で芸術的センスをもち、身を飾り、うわさ話に興味をもつ。女性は、「男性を甘やかす、操縦する」「実用的な」存在で、少女は「少年よりもいきいきと聡明で企画性にとんで」いる²⁴。これは、欧米型の「男らしさ／女らしさ」とまったく逆転した状態である。

では、ここで当面問題にしなければならない欧米社会の「男らしさ／女らしさ」は何に由来し、かつどのように定義づけられているのであろうか。ユダヤ・キリスト教における女性の劣等性は、旧約聖書の創世記第二章にみるアダムとイブの創造される過程と、楽園追放の経緯に由来する。アダムが神の姿に似せられて土から創られたのに対し、イブは彼の「助け手」として、彼の肋骨から創られたことと、禁断の木の実を食べるようにアダムを誘惑し、人間の原罪に対してより大きな責任を負わなければならない存在となったことは周知の通りである。そこから女性は「弱い、不純な、未熟な、不完全な」基本的特性をもつという見方を何十世紀にもわたってされてきた。これに対して男性は、「(物事を)認識し、完全で、現実化する」特性を基本的にもつと仮定されてきた²⁵。そして人間の本来生物的性差に基づいて有する特性に重ね合わされ、拡大・強化されて両性の特性のステレオタイプが形成された。それは一般によく用いられて馴れ親しんでいるようであるが、まだ十分検討された概念ではなく、あいまいさを含んでいるという指摘もあり、実証調査の試みがなされている²⁶。

一般に「男らしさ」のステレオタイプは、「攻撃性、支配性、厳格性、論理性、競争性、業績志向、思考力を有すること、独創性」を含み、反対に「女らしさ」のステレオタイプは、「受動性、追従、優しさ、情緒、協調、養育性、直観性、保護、柔軟性」から成っているとされる²⁷。「女らしさ」のステレオタイプを女性の劣等性と絡めていうと、女性は「弱く、不純で、未熟で、不完全」であるのだから「(夫や父に)おとなしく追従し、人と協調して、より弱い者をいたわり、養育」しなければならないということになる。前述のように、「男らしさ・女らしさ」の定義が不明確であるということで、J. S. チャフェッツは、一グループが6人の男女学生から成る13のグループを編成し、そこで「多くのアメリカ人が両性を特徴づけるのに用いる語句」を検討した結果を、7側面に分類している(第1表)。

ベムは、スタンフォード大学の学部学生1,500人を対象として、「性の型にはまった(sex-typed)」人が、現実に行動面で限定を受け、「両性的(中性的)」な人が、適応的かどうかの実証を試みている。その為には、個人の心的特性が「男らしい」か「女らしい」かあるいは「両性的」かを測定しなければならない。そこでBSRI(Bem Sex Role Inventory)を考案してい

第1表 性別分業のステレオタイプ特性

特徴	男性の特性	女性の特性
I. 身体的	男らしい, 活発, 強い* ぞんざいで, 容貌や年をとることを気にしない 勇敢	弱い, 頼りない, きゃしゃ, 不活発* 容貌や年をとることを気にする 官能的 優雅
II. 機能的	かせぎ手, 供給者*	家庭的 母性的, 子どもに夢中になる* 教会に通う
III. 性的	性的に積極的, 経験豊富* 独身の地位を気にいる, 男性は配偶者に「とらえられる」	純潔, 未経験, 二重の基準* 結婚しなければならない, 女性は配偶者を「つかまえる」 性的に受身, 無関心 産児制限に責任を負う 誘惑的, 軽薄
IV. 情緒的	非情緒的, 利己的, 泣かない*	情緒的, 感傷的, ロマンチック* 泣ける 表情に富む 思いやりがある 神経質, 不安定, 恐がり
V. 知的	論理的, 知的, 合理的, 客観的, 科学的* 実際の 機械的 公的関心, 活動, 社会への貢献者 独断的	散漫, あさはかな, 浅薄, 矛盾する, 直観的* 非実際の 知覚的, 敏感 「芸術家気どり」 理想主義的, 人道主義的
VI. 人間関係	指導者, 支配的* 鍛練主義の人* 自立的, 自由, 個性的 自己本位的	従属的, 軽薄, はずかしがり, うわさ好き 意地の悪い, 卑劣な, 気まぐれな* 依存的, 過保護, 共鳴しやすい* 地位に神経質で競争的, 洗練された, 社会的寛容に熟達した* 従属者, 補助的, 従順な 自意識の強い, すぐに恐れる
VII. 他の人間的特徴	攻撃的* 成功志向, 野心的* 自尊心の強い, 自己中心的, 自信に満ちた 道徳的, 信頼できる 果断な 競争的 抑制されていない, 冒険好き	けんそんな, 恥かしがりの, 優しい* 忍耐強い* うぬぼれが強い* 愛情深い, 優しい, きゃしゃな, 柔軟な 非攻撃的, 静的, 受身的 のろい 無邪気な 非競争的

* 13グループ中5～6のグループが記載した属性

るが、それによると「男らしい」パーソナリティ特性としては、「野心的、独立独行的、自立的、断言的」が、「女らしい」パーソナリティ特性としては「慈悲深い、優しい、物わかりのよい、他人のニーズに敏感である」が挙げられている。また「中立的」特性には「誠実な、友愛的、感じのよい」が挙げられている²⁸が、これらは他の定義と重複し、大きな相違はない。ベムは、調査においては、400のパーソナリティ特性を記したリストを配布し、「男らしさ」と「女らしさ」の得点がほぼ同じである場合、その人は「両性的」性役割をもつと仮定した。その結果、対象者の50%が、従来の「妥当な」性役割型を示し、15%が逆の性役割型で、35%が「両性的」であった。そしてこのようなパーソナリティ特性と実際の場面——たとえば、仔猫との触れあい、6カ月の乳児への接し方、感情問題に対する反応——を組み合わせて考察をすすめている。その結果、固定した性役割が行動を制限すること、特にそれは、「男らしい」男性に明確に表われていた。つまり「男らしい」男性は、伝統的に男性の役割とされるような自立・断言は非常によく行なうが、仔猫や乳児・困っている人に応答するというような、いわば暖かさ・戯れ・関心を示すという人間的特性に欠けていた。さらにベムは、活動を「男らしい・女らしい・中立的」の三つに区分し、三者を互いに組み合わせて二者択一場面を設定し、「性の型にはまった」人が実際に他の性の行動を忌避するかどうか考察した。項目は30組作成されたが、たとえば「男らしい」活動と「女らしい」活動の二者択一では、「蝶番に油をさすか哺乳びんを用意するか」という選択肢があり、「女らしい」活動と「中立的」活動では「毛糸を巻いて玉にするか新聞を地域別に区分するか」があり、「男らしい」活動と「中立的活動」の組合せでは、「板を釘づけするかオレンジの皮をむくか」という選択肢であった。この場合、「性の型にはまった」学生の71%が、極めてステレオタイプ化された活動を選択し、これに比べて「両性的」学生の42%しかそのような選択を行わなかった。また、従来の性役割と逆の性役割を遂行することに対して、「両性的」な人より、「男らしい」男性、「女らしい」女性の方がよくないと思っていた²⁹。

以上からS. ベムは、伝統的な「男らしさ／女らしさ」が、実際にいかに人々の行動を制限するかについて確信を得た。だが現代社会のように複合化し、その中での人間関係も多様化せざるを得ない状況にあっては、個人が従来のステレオタイプ化した性役割を遂行するのみでは、適応できなくなるのであって、このような社会で、さまざまな状況に適応しつつ個人が生きていくには、心理的健康の新しいそしてより人間的な基準が「アンドロジニィ」と明確に示されねばならないし、またそのように願うと結論づけている³⁰。

(四)

ユダヤ・キリスト教文化のように、男性原理が支配するところでは、脈々と存在し続けるが「周縁」に位置するアンドロジニィが、今日、表舞台に引っ張り出されたのは、極限に至った「男らしさ／女らしさ」のステレオタイプと、現実の両性のあり方の間の緊張関係の解消のためである。それは、特に女性の側から、前述のように、本来の両性の心的状態は、「男らしさ」と「女らしさ」の両要素を合わせ持つのであるから、どのように社会・文化が、個人の

心的状態の一方を切り捨てようと試みても、本来の状態に戻ろうとするエネルギーが生じるという認識に拠っている。従来の両性をめぐるステレオタイプは、両性の生物学的性差、その中でも特に女性の母性（妊娠・出産・授乳）を梃子として形成されてきたが、今日の女性のライフサイクルを母性という単一の原理で貫くには、それは、あまりにも長期間化した。それにもかかわらず、女性が母性に没頭しなければならないという観念に捉われるところから（「早く子離れをしなければならない」というのもその裏返しである）、さまざまな困難（更年期における精神疾患、心身症、育児における過保護など）を生じてきた。反対に、男性のもつ「手段的」役割において第一でありかつ主なものは、「供給者 (provider)」としてである。したがって男性はそれを損失した場合（退職、失職）に、精神疾患、心身症にかかったり、さらには本

		(男らしさ)	
		中央値以上	中央値以下
(女らしさ)	中央値以上	両性的	女らしい
	中央値以下	男らしい	分類不可能

中央値分割による男らしさと女らしさの得点からの個人の類型化の図式

(Janet Taylor Spence & Robert L. Helmreich, *Masculinity & Femininity: their Psychological dimensions, correlates, and antecedents*. 1978, 35p. Table 3-1.)

来の男性としての生物的能力さえも損ってしまうといわれている³¹。このように、現実と合わないステレオタイプに捉われることの弊害を除去しようという目的を達成するために、アンドロジニイというパースペクティブが登場したのである。そして、その追究は、主として心理学の分野での実証研究の傾向にある。その際の作業仮説における「男らしさ」と「女らしさ」の関係による個人の類型化は図1にみるような図式

になる。

女性の側から、現代の社会構造、文化構造に批判の目を向けられるに至った背後には、女性を取りまく状況の変化がある。先ほど触れた生物学的側面では、平均寿命の大幅な延び、出産児数の減少、全面的育児期間³²の短縮があり、教育的側面では、高等教育の普及が考えられ、経済労働的側面では、技術革新とサービス業など産業のソフト部門の増大が、また従来女の持場とされてきた家庭においても、家事の電化、生産活動との分離、核家族化による機能の縮少があげられる。それによって女性は、自己確認をする能力と余裕を獲得したのだが、客観的状況は、従来の「女は家庭に」というイデオロギーが支配的であり、それに縛られた女性のエネルギーは行き場を失い、ベティ・フリーダンが『新しい女性の創造』(The *Feminine Mystique*, 三浦富美子訳, 大和書房, 1969年)の中で描き出した、いいしれぬ欲求不満に陥っていた。そしてやがて自ら、その根本原因が、女性は垂直的(階級的)には、分散し個々別々で、利害関係で対立しさえしているが、水平的には、ともに社会の「周縁」に押しやられてきた存在であることに気づいた。とりわけアメリカにおいては、「男らしさ」の核心ともいべき「攻撃性」の具体的表現としてのベトナム戦争の敗退は、女性のこのような視点をより先鋭化させた。個としての、また種としての存続の為には、社会組織構成原理を、文化を、男性中心主義から、女性の「産む性」を織り込んだ原理へ、変革しなければならないという展望が開けてきた。このようにすることは、従来の社会の動きと比べて減速することになるかも知れないが、やがて

それは男性の「人間性」回復にも通じることであり、真の男女平等へ至る道であるという確信に立っている。そして、それを実現するには、個人の心的状態から変革しなければならず、次に男女の対 (couple) としての関係も変革しなければならず、そこから個と集団、集団と集団の関係も変革していかざるを得なくなるという立場である。換言すれば、従来の閉ざされた体系から、開かれた体系への変革の提唱である。

開かれた体系は、柔軟性と融通性を有するが、他方、十分な個の確立を不可欠とする。それを達成する為には、全体的な心的状態を十分に活用させて、女性であれば「女らしさ」の要素が「男らしさ」の要素を潜りぬけることによって、「女らしさ」に質的变化と強度を持たせ、男性であれば逆の作業を通して「男らしさ」に質的变化と強度を持たせることができる。また、これによって従来以上の創造力を持つことも可能になるのではないだろうか。つまり、従来は社会的に切り捨てようと努力してきた心的構成要素を活用の方へ持って行くのであるから、その産物の種類も増える可能性がある。また、両性関係においても心的な共通基盤をもつことによって、深い理解を相互に持つことができ、従来の絶対的依存とは異なる相対的依存を達成することができる。換言すれば、両性の関係を、垂直的な序列関係から、水平的な平等関係にすることができる。従来の絶対的依存は、生物学的性差に対応して両性に「男らしさ」と「女らしさ」を二分して配分することから、必然的に生じるのであるが、それが両性 (=夫婦) の「いつでも一緒症候群 (togetherness syndrome)」をきたし、両性の関係を大きく損う結果となることは、オニール夫妻の『オープン・マリッジ』 (*Open Marriage—A New Life Style for Couples*, 坂根徹夫・徳田喜三郎共訳, 河出書房新社, 昭和50年) をみれば、明白である。しかし、それは、従来と異なる奇抜な・奇様な行動をもたらすのではなく、現象面では従来と何ら異なることがなくても (また異なることがあってもよいのであるけれども)、行動の動機と相互理解の程度で、従来と相違するのである。

また確かに、個と集団の双方における変革は相関性をもつのであるが、第一に個のレベルから出発しようとするのが「女性学」の立場である。その目標はまた、社会構造の中で、私的事象として、せいぜい家族集団の中で取り上げられるにすぎなかった人の再生産の側面、換言すれば「産む性」をめぐる諸々の事象を、人間のもっとも根源的な問題として公の場に引きずり出し、社会構造に組み入れようとするところにある。そのような問題は、論理的に割り切って処理のできない不可解さ・捉え所のなさをもっているが故に、またあまりにも個々の事象の具体性が強すぎるが故に、特に機能主義の立場からは捨象されてきた部分でもある。

本稿においては、女性学のパースペクティブとしてのアンドロジニについて、極く簡単な紹介をしたに留まるが、今後、それをさらに煮詰め、厳密に定義づける必要がある。それはとりもなおさず、社会学の立場からは、性役割をめぐる問題であり、そこには一見明らかにみえる性別をめぐることも、実は検討されるべき点が多々あることは、橋詰大三郎の「性別のありか」(『女性の社会問題研究報告第2集』, 女性の社会問題研究会, 1978年) において明示されている。ただ、アンドロジニにかんして、筆者が知り得ただけでも、シンガーのように、決して到達し得ないが、理想として描かれる状態を指す立場と、現在心理学の分野で普及してき

た「男らしさ／女らしさ」を尺度化した実証的立場とがある。女性学がパースペクティブとして、どちらを重視するのかによって、女性学自体の存続の意義・可能性も相違してくる。しかしいずれにしても、女性学の成立事情から推して、最近、「教室での女性学」において出てきた「学」としての存在を確立するために、女性解放運動と袂を分ち、方法論・理論を樹立しようとする動き³³は、かえって女性学の根を絶つことになり、自滅化を招きかねない。女性学はむしろ、アンドロジニイというパースペクティブを既存の学問研究の中に導入させる触媒として、存在意義があり、それが実現した時点で発展的解消をする。あるいは広く「人間学」の一分野として存続するのが妥当なのではないだろうか（それは、近い将来達成する見通しを持たないが）。最初の女性解放運動が、参政権という政治的側面での権利獲得であった段階から、さらに生活の多方面における実質的な平等を旨として最近の女性解放運動は展開され、その運動の基礎づけとして、女性をめぐる状況・女性自身を研究しようとして生まれたのが女性学であるという点を捨象してはならないであろう。

註

1. 当初から “women’s” studies と一定していたのではなく、“female” studies, “gender” studies, “dimorphics” あるいは “feminist” studies と呼ばれたりした (Sheila Tobias, “Women’s Studies: Its Origin, Organization, And Prospects”, *The Higher Education of Women*, ed. by Helen S. Astin and Werner Z. Hirsch, 1978)。また women’s studies の邦訳も、館かおる氏が明らかにしているように、「女学」とされていた (館かおる「アメリカ諸大学における女性学講座の成立と展開」、『人間発達研究』第3号、お茶の水女子大学心理・教育研究会、1978年6月)。
2. Florence Howe, “No Ivory Towers”, (*Ms.* September 1973) 47.
3. *ibid.* 46.
4. 館かおる, 「アメリカ諸大学における女性学講座の成立と展開」『人間発達研究』第3号, お茶の水女子大学心理・教育研究会, 1978年6月 8—16頁。
5. F. ハウによれば、第一段階から第二段階へ発展しているか否かという指標は、嫡出性 (legitimacy), 成熟性 (maturity), 責任 (responsibility) の三つである。すなわち、カリキュラムに正式に組み込まれ、さまざまなレベルの授業を行なうことができ、学位授与や職業との関係について責任を負えるかどうかということである (Florence Howe, *Seven Years Later: Women’s Studies Program in 1976*, (June 1977))。
6. Sheila Tobias, *op. cit.*, p.92.
7. *ibid.*, pp.92—93.
8. Florence Howe, *op. cit.*, p.78.
9. ジョー・フリーマンは、女性解放運動を、その組織の型、成員性、活動内容と目標によって「古い派」と「若い派」に分類し、両者の差異と関連性を考察している。つまり「古い派」とは、「全国婦人組織 (National Organization of Women)」のように、平均年齢がそんなに若くない、主として有職婦人 (男性も含む) から成り、法的・経済的問題解決を旨とし、従来のピラミッド型の全国組織を形成している運動体を指す。他方「若い派」は、若年層の女性から成り、非全国組織で、むしろ小集団を形成し、教育・サービスプロジェクトで活動する集団である。(Jo Freeman, *The Politics of Women’s Liberation*, 1975. ジョー・フリーマン『女性解放の政治学』, 奥田暁子／鈴木みどり訳, 未来社, 1978年)。
10. Janet Saltzman Chafetz, *Masculine/Feminine or Human?: An Overview of the Sociology of*

- Sex Roles* (Itasca, F. E. Peacock Publishers, INC., 1974) ix.
11. Warren Farrell, *The Liberated Man: Beyond Masculinity; Freeing and Their Relationship with Women* (Random, 1974).
 12. Sheila Tobias, *op. cit.*, p.80.
 13. *New Women, New World: The American Experience* (C. Bognall, M. Broun, D. Corbet and others, Women's Studies Curriculum Series, the University of Michigan, 1977) p.74.
 14. *The Oxford English Dictionary*, (ed. by James A.H. Hurry, Henry Bradley, W.A. Craigie, C.T. Onions, Oxford, The Clarendon Press, 1961).
 15. June Singer, *Androgyny: Towards a New Theory of Sexuality* (London, Routledge & Kegan Paul Ltd., 1977) p.32.
 16. Carolyn G. Heilbrun, *Toward A Recognition Of Androgyny* (New York, Harper Colophon Books, 1973) xii.
 17. Janet T. Spence & Robert L. Helmreich, *Masculinity & Femininity, Their Psychological Dimensions, Correlates, and Antecedents*, (Austin, University of Texas Press, 1978) p.109.
 18. June Singer, *op. cit.*, p.33.
 19. *ibid.*, p.21.
 20. *ibid.*, p.22.
 21. Carolyn G. Heilbrun, *op. cit.*, ix-x.
 22. 山口昌男「文化における中心と周縁」(『世界』, 岩波書店, 1977年7月) 33頁。
 23. イスラエルのキブツは, 固定化された性役割を排除する実験でもあったが, やがて男女の筋力差と女性の妊娠・出産・授乳が女性を家事的労働(炊事・洗たく・掃除・育児)に, しかも一女性にとってはその内のいずれかを一日中行わなければならない労働形態に閉じこめる結果になったと報告している(エレノア・E・マッコヴィ編『性差その起源と役割』, 青木やよひ他訳, 家政教育社, 1979年, 第五章参照)。
 24. M. ミード『男性と女性上』(田中寿美子・加藤秀俊訳, 東京創元社, 昭和51年)第二部参照。
 25. June Singer, *op. cit.*, p. 86 および Janet S. Chafetz, *op. cit.*, pp. 96—97. を参照。
 26. Janet S. Chafetz, *op. cit.*, p.35.
 27. June Singer, *op. cit.*, p.34.
 28. Sandra Lipsitz Bem, "Androgyny Vs. the Tight Little Lives of Fluffy Women and Chesty Men" (*Psychology Today*, Vol. 9—No.4 (Sep. 1975)) 59—60.
 29. *ibid.*, 60—61.
 30. *ibid.*, 61.
 31. Janet S. Chafetz, *op. cit.*, pp.62—66.
 32. 子どもがほぼ全面的に世話を必要とする期間は, 出産児数の減少, それに伴う出産期間の縮小によって, 短期間化した, 現代日本のように, 子どもの教育期間の延長と, それに親も一緒に参加する受験体制にあっては, 育児期間の長期間化をいうこともできる。
 33. コロンビア大学, コーネル大学, ポートランド州立大学, サン・ディエゴ州立大学およびニュー・ヨーク州立大学(バッファロー)の五大学は, 「女性学」の理論樹立と対象・目標の明確化の為に「女性学企画委員会」を設けている。しかし, それらは最近誰が, どのように女性学を教えるかをめぐって泥沼に入りこんでいるといわれる (Sheila Tobias, *op. cit.*, p.84)。

原稿受理 1979年6月29日

The Perspective of Women's Studies : Androgyny

Kimiko Yagi

In the 1960s' women's studies grew out of the Women's Movement, and has now developed "phase two". In fact, it can now be found in many course catalogues and women's studies programs have been established with budget and staff.

It is several years since we, Japanese, have known of women's studies, but the perspective of women's studies is not yet clear for us. So, I will try to clarify it in this paper.

We can find three perspectives in the Women's Movement : the radical perspective, which aims at organizing Lesbian groups ; the moderate perspective, which works towards establishing a society based on the principle of "androgyny"; the traditional perspective, which considers society to be, separated into two parts : one male, the other female.

Women's studies has inherited the second perspective from the Women's Movement. Then, from the sociological point of view, I will try to present some materials about "androgyny" and discuss "masculinity" and "femininity".

"Androgyny" comes from mythology, and describes a dualistic vision of reality, where each individual has differing portion of the masculinity and the femininity. If this perspective is applied to all aspects of life, women's studies becomes unnecessary. For if we reach a state of mind where we can freely express both the masculinity and the femininity in us, the two genders will gain substantial equality.